3．舞踏会

フランシス・ローレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３．舞踏会

【Ｎコード】
Ｎ１０６９Ｔ

【作者名】
フランシス・ローレライ

【あらすじ】
イサムとマミが楽団のメンバーとしてウィーンの冬の風物詩、バル（舞踏会）へ。

舞踏会の晩、冬のウィーンにしては、珍しく晴れ上がっていた。
アルテドナウ・アンサンブルの招かれた舞踏（バル）会の会場は、町の北にドナウ河を渡った向こう側の、「ウィーン国際センター」と呼ばれる一角にあった。そこには、イサムのフルートの相棒、ハロルド・チュンが普段、勤務しているＩＡＥＡ（国際原子力機関）本部もある。
イサムが駆けつけて会場に入ると、そこは東京武道館のように天井が高く、広大な体育館の風情があった。
そこには、たくさんの参加者がカップルで到着し、クロークの前でたむろしていた。
普段、おしゃれとは言い難いウィーンっ子も、この夜だけは雰囲気造りに貢献しようとするので、立ち居振舞いが大変洗練されて見える。
大人の女性は、シックでエレガントなロングドレス、そして若い女性は、短いスカートでセクシーさを演出する。
男性はとにかく女性の引き立て役で、黒と白が基本だ。　黒っぽい上下、白いシャツに蝶ネクタイ、そして「カンマー・ベルト」という黒い腹巻きをつけている。
アルテドナウ・アンサンブルの楽士たちも、この日ばかりはドレス・コードに従い、白と黒で統一していた。
彼らは舞踏会場にたどりつくと、会場のフロアよりも一段高い、オーケストラのためのステージに昇り、そこでいつも通り、オーケストラ風に展開していた。
イサムも御多分に漏れず、両襟がピンと立ったワイシャツに、黒い蝶ネクタイ、それに濃紺のジャケット姿だった。
「何で、我々フルート吹きまでもが、喉を締め付けるのだろうか」と、彼は多少の不自然さを感じながらも、晴れ舞台の気取りを感じ

るのだった。
ステージに昇って周囲を見廻すと、マミは既に、第2ヴァイオリンのグループで楽器を調整していた。吹奏楽のグループで、チュンさんが既に着席していた。イサムはそこで軽く会釈し、隣にすわった。
しばらくするとオーボエが、調音の先導役として、真ん中の「ラ」音を大きく鳴り響かせた。すると他の楽器も次々と同じ音を出し、チューニングする。
イサムも一応、フルートで「ラ」音を出してみた。そして自分なりに調和が取れていると納得し、ほっとする。
そうこうするうちにマエストロ・フィッシュマンが時間に遅れまいと、少しあわてた様子でステージに上がってきた。
「彼の焦る姿もなかなか、乙なものよ」と、イサムは可笑しく感じてしまう。
ステージは言わば特等席で、舞踏会場が良く見渡せた。開会を待つお客さん達は、舞踏会場の周囲を囲む壁際のテーブルで、ワインやシャンパンを飲み、ガヤガヤと歓談していた。

いよいよ開会である。
司会者の紹介を受けて、舞台の上から主催者代表が、自己紹介を兼ねて挨拶した。
「今宵は、伝統あるウィーン名物のお菓子を作る、我々菓子職人組合によるバルです！　東洋の月歴なら、２００１年の正月でしたっけ？　皆様、せいぜい羽を伸ばし、日頃のうっぷんを晴らして下さい！」と、にこやかに式辞を述べた。そして、
「最初に演奏してくれるのは、アンドレ・フィッシュマンの率いる、アルテドナウ・アンサンブル！」と、締めくくった。
すかさず、大きな歓声と共に、拍手喝采が沸き起こった。
そして再び、会場がしいんとしてくる。
ステージ中央の一段高いところから、アフロ・ヘアと口ひげのマ

エストロ・フィッシュマンがタクトを振りおろし、アルテドナウ・アンサンブルがシュトラウスの「ウィーンの森の物語」を演奏し始めた。

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

　すると、それに合わせて、これから社交界入りする17歳の「デビュタント」達が真っ白なイブニング・ドレスに身を包み、蝶ネクタイ姿の若い男の子とペアで腕を組み、整然と並んで入ってくるではないか。

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

　男の子たちはみな背筋を伸ばし、すました表情で右側の女の子をエスコートし、女の子たちは右手に、小さな白いブーケを握っている。彼らが並んで挨拶し、踊る姿には、目を見張るばかりの初々しさと美しさ、そして華やかさ。

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

１，ニ，三，１，ニ，三，１，ニ，三……

ｅｉｎｓ，ｚｗｅｉ，ｄｒｅｉ……ｅｉｎｓ，ｚｗｅｉ，ｄｒｅｉ……ｅｉｎｓ，ｚｗｅｉ，ｄｒｅｉ……

　ワルツの王者、シュトラウスの曲が何曲か続き、デビュタント達のお披露目が、終わりに近づいていく。

「いつ見ても、感動的だね」と、イサムがフルートを膝に置き、チュンさんにささやく。

「Ｙｅｓ，Ｉ ｋｎｏｗ．Ｖｅｒｙ ｓｅｘｙ，ｔｏｏ．」と彼がにこやかに答える。

　セクシーか……確かに規律がありすぎるのだろう……と、感慨深げなイサムだった。

間もなく舞踏会場が一般にも開放され、「美しき青きドナウ」の演奏をバックに、カラフルなドレスの女性達がペンギン気取りの紳士方とペアでいっせいに入場する。
リズムが４拍子に変わると今度は、シュトラウスの喜歌劇「こうもり」序曲。
たくさんの老若男女がペアで、狂ったようにくるくると会場を巡る。その姿は、華麗で爽快そのもの。
女性方は、華やかな衣装ですっかりおしゃまになり、「今夜こそ、私の美貌と才能をひけらかすの！」と自負するかのようだ。
「あ、萩谷だ。一緒にいるのは、ミス平原か」と、フルート手すきの間に、イサムは仲間を発見した。
彼の幼友達の萩谷は、フロアの真ん中でピンクのミニドレスの若い女性と、気持ち良さそうに踊っていた。
「あのくらい優雅に踊れると、日本人も結構サマになるものだ……」
平原さんはイサムの上司だった。大学生のお嬢さんは、休みを利用して日本から遊びに来ていた。
「あの二人は、御両親公認のカップルだろうか……羨ましい限りだ……」と感じるイサムだった。

フロアでは、彼らがリズムに合わせて舞いながら、言葉を交わしていた。
「ウィーンは、初めてでしたっけ？」と問いかける、萩谷オサム。
「ええ……」
「じゃあ、舞踏会も初めて？」
「ええ。こんな季節に親元に来ても、と思っていたから、感激！」
と、ミス平原。
「良かったね……それにしても、上手だね」
「ちゃんと、リードして下さるから……」

１０時頃になると暫く休憩が入り、アルテドナウ・アンサンブルの楽士達は、ほっとしてステージから退場した。トロンボーンやクラリネットなど吹奏楽器中心のビッグ・バンド「メッセンジャーズ」と交代するのである。

イサム達のアンサンブルがこの土地ゆかりのワルツ、ポルカそして民族音楽を、「Ｅｌｅａｎｏｒ　ａｎｄ　ｔｈｅ　Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒｓ」が、モダンなジャズ系の曲を担当していた。

最初の曲は「真珠の首飾り」。

すると早いテンポの好きな女性たちがこの時とばかり、カラフルなミニドレスで、真面目を装うパートナーとはしゃぎ、踊り、体をくねらせる。

紳士方の、格好の目の保養ではないか。

「冬を吹き飛ばそう！」との気迫。

皆、とても一生懸命で、楽しそう。

要するに、テイの良い大規模ディスコなのだ。

少し間をおいて、女性のハスキーな歌声が聞こえてくる。

Ｍｏｏｎ　ｒｉｖｅｒ，　ｗｉｄｅｒ　ｔｈａｎ　ａ　ｍｉｌｅ

……

スリムでセクシーな金髪のヴォーカルが、エリナーだった。彼女は頬骨が高く、色白。チャイナ・ドレス調に深いスリットの入った、銀ラメのロングドレスを着ている。

Ｉ'ｍ　ｃｒｏｓｓｉｎｇ　ｙｏｕ　ｉｎ　ｓｔｙｌｅ，　ｓｏｍｅ　ｄａｙ　……

そこでイサムはフルート仲間のチュンさんや津軽マミ、それからコントラバス奏者のキャロルを誘い、夜食を目指すことにした。

キャロル・ゴンザレスは南欧系のアメリカ人で、子供の頃、沖縄に住んでいた。体格も日本人的で、近づきやすいのだ。

「ねえ、向こう側でお寿司を売っていたわよ」と、ほっとした表情でマミが言う。

「行ってみようか」とイサムが反応する。

「お寿司？　いいですね！」とキャロルが声を上げる。
「Ｈｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｓｏｍｅ　ｓｕｓｈｉ　？」と、イサムがチュンさんに声をかけた。
「Ｗｈｙ　ｎｏｔ，　ｗｉｔｈ　ｓｏｍｅ　ｗｉｎｅ，　ｐｅｒｈａｐｓ？」とのっぽのチュンさんが、にこにこしながら答えた。
　果たしてその出店は見つかり、イサム達はサーモンとかアボカドとかマグロとか、思いつくままに注文した。立ち食いスタイルのその店は結構人気があり、たくさんのカップルが寄ってきてはサービス係の若者から寿司をさらっていく。
「知り合いの方とか、いました？」と、イサムがキャロルに尋ねる。
「ＩＡＥＡの、かの有名なハンサム・ボーイがいたわよ」と、キャロルがうれしそうに答えた。
　チュンさんが、チラッとキャロルに視線を送り、
「フロアで踊っていた、別人だよな……」と言った表情をする。チュンさんも一応、ＩＡＥＡの職員なのだ。
　イサムがすかさず、
「エリナーも、格好いいね」と、チュンさんに小声で言う。
「そう、ね……」と、チュンさんが目配せする。
「彼女、少し下品じゃない？」と、マミが牽制してきた。
気がつくと、辺り一面に香水の香りが漂っているではないか。
「この間は楽譜を届けてくれて、助かったわ」と、彼女がイサムに言った。
「いや、なるべく早くと思って……僕の方がウィーンに慣れているし……」

　それから３０分も経たないうちに、ステージに戻る時間がきた。
「トリッチ・トラッチ・ポルカ」と口ひげのマエストロ・フィッシュマンが大声で呼びかける。
　イサムは一応気分良くチュンさんに挨拶しながら席に座ったが、いざ吹き始めると、集中力が足りない。

アルコールが回り、マミのことばかり、考えていたからだろう。
「大丈夫？」と言った風情で、隣からチュンさんが、チラッと目を光らせる。
そこでイサムは座る姿勢を正し、気合を入れ直した。
３拍子。今度は４拍子。そして、あげくの果てには１２拍子。

しかし夜中の二時を過ぎると、いかに金髪のエリナーたちと交代しながら、あるいはスナックやアルコールで士気を高めながらとは言え、疲れと眠気でみんな、デスマッチ状態になりはじめた。いつの間にかフィッシュマン先生の代わりに、背の高いコンサート・マスターがタクトを振っている。
イサムも疲労のせいか、目の前の譜面台が、やけに光るような気がする。
フルートの演奏は、たくさん息を使う。際限なく風船を膨らませるように、消耗するのである。

４時半頃、フロアで整列した男女が手に手をつないで昔風の「カドリール」（４人一組）を踊る。
そこで、エリナーたちと最後の交代。
エリナーがＭｅｓｓｅｎｇｅｒｓの伴奏でスローな曲を歌い始める。
永遠のクラシック「ラストダンスは私と」だろう。
そこでイサム達は、チークダンスに興じる若いカップルをよそに、三々五々、目立たぬように会場から消えてしまう。
イサムはフルートをケースにしまいこみ、マミの様子を見に行った。
「どう？　そろそろ、帰ろうか」と、楽器をケースに納める彼女に声をかける。
「ええ」
彼女の楽器ケースのＭとＴの大文字が、妙に自己主張しているよ

うだ。
「アパートまで、送るよ」
二人は会場の外まで出るとタクシーを拾い、この間、楽譜を届けに来た彼女のアパートに向かう。

建物の前で、タクシーが止まる。
「マミちゃん……悪いけど、水を一杯くれる？」と、精魂つき果てたイサムがつぶやいた。
あたりは既に、ほんのりと明るい。
「寄って行くなら、どうぞ」と、彼女が言ってくれた。
「……ああ、助かる……」
タクシーが、去っていく。
彼女は黙ったまま、玄関の鍵を開けはじめる。深閑としており、鍵の音だけがカチャカチャ響く。
そこでイサムはだんだん、意識が朦朧としてくる。
階段を登り切ったところで、いよいよ眠気が襲ってくる。
ドアが開く。アパートに入り、居間まで来ると、イサムは倒れるようにソファに沈み込んだ。
彼女が素直に、グラスで水を運んでくる。
「あ、どうも……」
彼がそれをうやうやしく受け取り、飲み始める。
彼女がナイトガウンに着替えて戻る頃には、彼は横になり、熟睡していた。
「意外と、可愛いらしいのね……」と思いながら彼女は、毛布をかけてあげる。
そして身をかがめ、頬に唇を寄せ、お休みのキスをしてあげた。
白雪姫と違い、彼が起きることはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1069t/

３．舞踏会

2011年7月30日03時21分発行